

『禪秘要法經』の禪法と思想について

Tran Thuy Khanh

はじめに

『禪秘要法經』は、『大正藏』第十五卷の「禪經類」に属するものであり、鳩摩羅什が弘始年間（401～413）に長安で訳出したものであるとされる。

佐藤泰舜先生は、『禪秘要法經』の解題において、『禪秘要法經』は、阿含經典の修行法を継承し、そこで説かれる諸觀法の内容は、大乘教義の思想を示したものであるのではないと推定されている。¹⁾

本研究は、『坐禪三昧經』『思惟略要法』に続いて、『禪秘要法經』をはじめとする「禪觀經典」と「三昧經典」の実践方法を明らかにする研究の一環であり、『禪秘要法經』には、大乘仏教の思想の萌芽がみられるのではないかという疑問をもち、それを解明したいと考えている。

1. 『禪秘要法經』における四つの法会の諸觀法について

『禪秘要法經』の構成は、上・中・下の 3 卷に分かれ、四つの法会、即ち四つの短經を集めている。そのなかに、第一、第二、第三法会の三十觀法²⁾ 以外に、第四法会で八觀法を取り上げている。

第一法会では、仏は、王舎城の迦蘭陀竹園において、阿難の要請を受け、摩訶迦綺羅難陀の前世の因縁を説き、繫念法を説示している。そして阿難や摩訶迦綺羅難陀や大衆比丘に、不淨觀想最初境界をはじめ、白骨觀などの十八觀法を説示している。³⁾

第二法会では、舍衛国の祇樹給孤独園において、すでに阿羅漢の果を得た禪難提が、未来の衆生のために、罪障を除くには、どのような方法があるかを尋ねた。仏は、大衆比丘の代表として禪難提と阿難に、貪婬を対治するために、觀仏三昧と数息觀を説示している。⁴⁾

第三法会では、迦梅延の弟子である槃直迦は、愚昧放逸で、一偈も通達できな

い。仏は、舎衛国の多羅聚において、迦梅延の要請を受け、槃直迦の過去の因縁を説示し、その後、槃直迦及び未来衆生のために、煖法観などの八観法を説示している。⁵⁾

第四法会では、仏は、舎衛国の祇樹給孤独園において摩訶迦葉の弟子であり、阿那含果を得た阿祇達多が、五年の苦行で阿那含果を得たにもかかわらず、阿羅漢果に到達することができない。過去の忍辱太子の因縁を説いた後、慈心観を説示している。未来の衆生のために、阿那含果より阿羅漢果に至る実践方法を説示し、観仏、慈心観、因縁観、数息観、法身仏観、四大清浄観、五陰観、三三昧観を説示している。⁶⁾

2. 『禪秘要法經』にみられる五門禪について

五門禪は、仏教において最初に修行する禪観であるとされる。ここでは、第一、第二、第三法会の三十観法と第四法会の八観法とを合わせて、それを不浄観、慈悲観、因縁観、数息観、念仏観の五門禪に分類していきたい。

第一法会の第一の不浄観想最初境界から第十八の観身不浄雑穢、第三法会の第二十二の煖法観から第三十の火風大観、そして第四法会の四大清浄観までを、五門禪の不浄観に当て、第四法会の慈心観は、五門禪の慈悲観に当て、第四法会の因縁観、五陰観、三三昧観は、五門禪の因縁観に当て、第四法会の数息観は、五門禪の数息観に当て、第四法会の観仏、法身仏観は、五門禪の念仏観に当てる。

3. 『禪秘要法經』で説かれる空思想について

『禪秘要法經』に集められている四つの法会は、本經の中心として白骨観・不浄観・四大観を説示しており、阿羅漢果に至る悟りを目標としている。例えば、第一の不浄観想最初境界では、我慢心をもっている迦綺羅難陀は、仏が説かれた不浄観を実践した上、阿羅漢果を得たという⁷⁾。また、第十八の観身不浄雑穢では、放逸な槃直迦の比丘が、白骨観を実践して、阿羅漢果を成就したとされる。⁸⁾

このように、諸観法を実践し煩惱を断じ、阿羅漢果を得ることを、修行者の最終の目標とすることが、本經にみられる。ここで説かれる諸観法には、白骨観、不浄観、四大観などの説示の中に、「空思想」を汲み取ることができる。周知のように、「空」は、仏教の根本思想を示す概念である。仏教に説く「空」は、存在しない「無」と同義語ではない。事象は、因と縁とが和合して仮の在り様にあるとする。固定的不変的な独自の実体のないことを言っているから、因果関係の

(48) 『禪秘要法経』の禅法と思想について (T. K. Tran)

側面から捉えた縁起法と同じことを指す。従って、空と縁起とは、いずれの面からみても縁起は空の現象であり、空は縁起の本質であると考えられる。

上座仏教では、事象は因縁によって生じたものであり、実体がない諸法無我と、万物は常に変転してやむことがない諸行無常を「空」という。大乘仏教では、諸法実相は、中道であるとされる。理論的にいえば、事象は、因と縁が和合して起こる相互依存関係であり、仮名だけで、実体のない無自性とされる。実践的には、無所得、無執着を空という。本経で説かれる空思想は、どのようなものであるか、次に検討していきたい。

(ア) 『禪秘要法経』で説かれる空思想を表わす用語について

まず、第二の白骨観⁹⁾、第十四の外四大観¹⁰⁾、第十五の内四大観¹¹⁾、第十八の観身不浄雑穢¹²⁾、真無我観¹³⁾には、人間の身体の中心に、我体を構成する要素として四大・五陰・十二因縁に分析して、いずれも実体がないと観じ、無我・無常であり、虚空のように空であると観察することを説いている。

第四の臃腫膿血観¹⁴⁾、第五の薄皮観¹⁵⁾、第六の厚皮観¹⁶⁾、第十一の白骨流光観¹⁷⁾、第十四の外四大観¹⁸⁾では、一切の法は「来たらず去らず」「いずれの所から来ることなくいずれの所へ去ることもない」という。すなわち、事象は、六大、無数の要素や因縁によって生じ、因縁によって滅するものであり、そのものは、生じる時に来る場所があるか、滅する時に去って行く場所があるか、というような状態に捉われないことで、空を観じる。

第四法会の因縁観¹⁹⁾では、四大は、「無性相」であり、「如」「実際」と同じと観察する。即ち、物質を構成する地・水・火・風の四つの要素を分析すれば、その中には、一つ一つの実体がない無性であり、固定的な姿というものはない無相であると、空を観察している。ここでいう「如」「実際」は、『大智度論』²⁰⁾によれば、諸法実相の異名であるとされる。「如」には、各々相と実相の二種類がある。各々相とは、地大の堅、水大の湿、火大の煖、風大の動の各々に別相があり、実相とは、例えば、蠟燭は地大の堅さに属するものであり、蠟燭に火を点ければ、その堅さはなくなる。それ故に、四大の実相を追求すれば、不可得であり、不可得は空であると考えることができる。このように本経で説かれる「如」は、以上の意味と同じであると考えられる。第四法会の三三昧観²¹⁾では、一切の法は、実体がなく空であり、そこに自性を求めても、何も所有しないことであると空・無所有を観じることを説いている。

(イ)『禪秘要法經』で説かれる空思想を表わす比喻について

上座仏教と大乘仏教とを通じて、諸経論では、諸法は「空」とであると理解するために、空を表わす比喻がよく使用されている。

『禪秘要法經』で説かれる空思想は、多くの用語で表わされていると共に、空思想を表わす比喻も多く採用されている。例えば、第一法会の第十八の観身不淨雜穢²²⁾では、修行者は観身不淨雜穢の実践を通じて、一切の有為法を夢・幻・泡・影・露・電と観じている。また第二法会の第二十の数息観²³⁾では、色身、即ち物質的な身体を変化、響、鏡中像、炎、乾闥婆城、夢、旋火輪と観察している。特に、乾闥婆城の喩えは、『大智度論』によれば、声聞法では、城は仮であり、そのものを構成する諸の因縁は、事実であると喩えられる。菩薩道では、乾闥婆城は仮のものであり、それを構成する諸の因と縁も事実がない、ただ人の目を幻惑するだけで、人が火を空中に振り回すと、輪のように見える旋火輪のようで、諸法の空観を深く実践する者に対しての乾闥婆城の喩えとされる²⁴⁾。このように、本經で使用される乾闥婆城の比喻は、『大智度論』の意味と同じであると考えられる。以上、本經で説かれる「空思想」は、事象を構成要素に分析し、それ自体は存在せず、その事象は単に仮名のようなものであると見る。

上記の用語と比喻は、事象の本質を観て空に留まらず、事象は幻や乾闥婆城などのように、空と観るなかに、仮としての有を再発見している。ここに空と仮を止揚した中道、事象をありのままに見、不可得として執着しないと見る大乘思想の萌芽を読み取ることができる。

『禪秘要法經』は、阿含經典の修行法を踏襲しながら、阿含經典の修行法に留まらない。空を終極として安住することなく、幻や乾闥婆城などの比喻が示すように、これらを有、仮としての有を再発見することによって、但空を越えて、有を仮とする不但空を追認し、そこから非有非空の中道を望み見ることができる。つまり、空に停滞し、空を至上とする境地を突き抜け、有を定義し直し、中道の糸口を再発見することによって、現実世界に希望の光を見ている。この点から『禪秘要法經』は、阿含經典の修行法を残しているが、阿含經典の修行法に留まらず、そこで大乘の修行法を盛り込んでいると考えることができる。

まとめ

『禪秘要法經』で説かれる諸観法は、第一、第二、第三法会の三十観法以外に、第四法会で八観法を取り上げている。

(50) 『禅秘要法経』の禅法と思想について (T. K. Tran)

本経の全体をみると、白骨観・不浄観・四大観が頻出しているが、第一、第二、第三法会の三十観法と共に、第四法会の八観法を再分類すると、五門禅とぴったり一致している。

本経では、修行者にとって、罪障、煩惱を断じるために、諸観法を実践し、阿羅漢果に到達することを、最終の目標であるとしているが、白骨観などの実践を通じて、そこで説かれる空思想を表わす用語と比喻は、空だけを見るに留まらず、仮と中とを見、事象のあり様をありのままに見、執着しない中道の大乗思想の萌芽を読み取ることができる。

『禅秘要法経』の禅法と思想は、阿含經典の思想と修行法を踏襲しているが、修行実践の当然の帰結するところ、大乘の空思想に昇華するものであると考えることができる。このように、鳩摩羅什が翻訳した『禅秘要法経』は、大乘の思想を盛り込んでいることがみられるが、どの経論から、どのような影響を受けているか疑問が持たれる。これについては今後解明していきたいと考えている。

-
- 1) 佐藤泰舜「禅秘要法経解題」(『国訳一切経』経集部卷4・174～175頁)
 2) 本経の中に、第二十九観法は不説 3) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・242c～255a)
 4) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・255a～258b) 5) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・258b～263a)
 6) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・263a～267c)
 7) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・244b) 8) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・254b-c, 256b)
 9) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・245b) 10) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・250b)
 11) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・251a-b) 12) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・252c)
 13) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・262a) 14) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・246b)
 15) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・246c) 16) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・247a)
 17) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・248a)
 18) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・250a～251b) 19) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・265a)
 20) 『大智度論』「初品」四縁(『大正蔵』25・297c) 21) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・267b)
 22) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・254b) 23) 『禅秘要法経』(『大正蔵』15・258a)
 24) 『大智度論』「序品」十喩(『大正蔵』25・103b)

〈キーワード〉『禅秘要法経』, 『大智度論』, 五門禅, 空思想

(愛知学院大学大学院研究員)